

札幌市勤務医協議会ニュース

発行 札幌市勤務医協議会
札幌市中央区大通西 19 丁目
札幌市医師会館内

巻 頭 言

地域完結型医療

幹事 向 井 正 也

国は医療計画の地域医療構想において、地域の二次医療圏毎の医療機関の機能分化をはかり病棟毎の役割を「高度急性期」「一般急性期」「回復期」「慢性期」に分類する事を求め各都道府県が主体となって二次医療圏毎の役割を決めている所です。札幌圏二次医療圏は多くの人口を抱える医療圏ですが、超高齢化社会の入り口となる 2025 年に向けて人口減少はわずかであるが高齢者の割合が急増すると推計されており、病床数は約 3% 増加となり、今後の診療報酬の誘導により各病棟がおのずからそれぞれの役割に収斂して行く事が期待されています。

そのような状況で多くの大病院が採用している DPC による診療では、診療期間 II までは収益性が高い事や高度急性期を保つために在院日数短縮する必要もあり、急性期の治療を終えてもまだ治療を要する患者さんについては次の医療機関に移っていただいて退院に向けて治療の継続をお願いする必要があります。また DPC 制度は病院の体制等が評価されて診療報酬にかかる係数が変わってきますし、それぞれ疾患については合併症を含めて期間毎の点数が決定されており、医師の力量による医学的な観点で点数が変わるという事もほとんどありません。従ってそれぞれの疾患について治療ガイドラインに則ったクリティカルパスを作成して治療に当たる事になります。

さらにこのクリティカルパスは地域完結型医療を目指すときには地域連携パスとなって一群の医療機関で治療方針を共有して行く事が求められます。すなわち病院完結型医療から地域完結型医療への転換が求められています。しかしこのような大きな医療計画の変更については一部の医療関係者には知られてきていますが、医師を含めた多くの医療関係者は十分に認識していない状況と思われます。また、ほとんどの国民はこの事を全く理解しておりません。また、高度急性期を担う病院に直接新患が受診する事も段階的に国は制限を加えつつありますが、これについても国

民に十分に認識されているとは言いがたい状況です。このような説明を各医療機関がそれぞれの患者さんに説明する事は大変困難であり、行政や報道機関がきちんと市民に啓蒙して行く事が強く求められます。さらに我々医師同士も患者さんの情報を共有して同じ方向を向いた治療方針を決定して行くために地域で顔の見える病診連携、病病連携を深めて行く必要があります。このためには各医療機関が実施する地域連携の懇談会や医師会等の様々な会合に積極的に参加していただきお互いによく知り合う事が、まず地域完結型医療の構築の第一歩になると考えます。勤務医の皆様も積極的に近隣の医療機関の先生達との様々な会合等に顔を出していただき地域全体で実りのある連携を作り上げて、同じ方向性を持った札幌圏の地域完結型医療の構築してまいりましょう。

(市立札幌病院)

新 役 員 就 任

新任挨拶

幹事 小 林 尚 子

この度、札幌市勤務医協議会に参加させていただくことになりました。どうぞ宜しくお願いいたします。

私は、平成元年札幌医大第二内科入局後、平成 9 年より五輪橋内科病院(現在、札幌共立五輪橋病院)にて勤務、平成 27 年 4 月より札幌循環器病院に所属し同院のサテライトクリニック(中橋内科クリニック)で勤務しております。

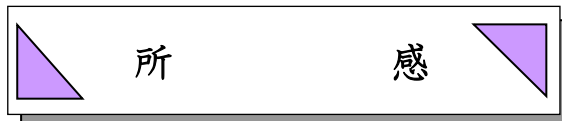
今年度、協議会の企画で女性医師の勤務状況調査をするにあたり、土田会長より協議会への参加をお誘いいただきました。本会の女性医師数は少ないと伺っていますので、今後さらに女性医師が参加しやすいよう自分が所属している北海道女性医師の会や性差医療研究会等で活動されている先生方とも連携していきたいと考えています。

土田先生は大学時代の部活の先輩でもあり、当時よりお世話になっておりますが、自分が結婚出産した頃ちょうど大学病院の医局長をされておりました。女性医師がまだ少なかった当時は産休・育児休暇の体制が

なく、出産後の仕事復帰の道が確定していない状態でしたので、いろいろと相談に乗ってくださり、無理なく仕事と育児を両立できるようサポートしてくださいました。土田先生をはじめ、周囲の先生方の支援のおかげで、今日まで仕事を続けることができたことを深く感謝するとともに、今度は自分も後輩の女性医師のサポートをお手伝いしたいと思っています。

最近女性医師数が増えている一方で、結婚や出産を契機に離職・休職せざるを得ない方も少なくありません。しかし、就業支援システムや復職プログラムの整備など、出産後も復職しやすい環境づくりが進んでいます。今後さらに必要なのは、実際の勤務先病院の体制整備にあると感じます。女性医師の復職サポートにはそれを支える同僚医師への業務負担が発生しますし、育児や介護といった家庭の役割は女性医師だけでなく男性医師にも必要とされてきています。休職や勤務時間の制約という問題は女性医師に限ったことではありません。単なる女性医師の就業支援ではなく、全医師が働きやすい環境づくりが理想と考えます。微力ではありますが、協議会に参加させていただくことで何か働きかけることができればと思っていますのでよろしくをお願いします。

(札幌循環器病院 中橋内科クリニック)



SPOTTER

幹事 占部 和之

「次の大会、スポッターをお願いします。」

三男のトランポリンコーチからの突然の依頼、この競技のお手伝いとしてよくあることのようなので、内容も聞かず了解した。当日、会場の控室に行くと、お揃いのTシャツとスケジュール表が渡された。聞くとトランポリン台の4隅に立って、選手が台から外れて落下しないように見守る係とのことだ。

トランポリンは、日本でも世界レベルの選手が出たことで注目されてきており、先日のオリンピックでも地上波で放送されていた。一流選手になると、7Mほどの高さまでジャンプする。この競技では技の難易度、出来栄の点数以外、跳んだ時の滞空時間が跳躍時間点として加算されるため、より高さが求められる。わずか4M強×2M強のベッドと呼ばれる部分で、かつ十分なジャンプをするため中心に比較的近い部分に、しかも10本連続で着地し続けなければならない、世界レベルの選手でも中心を大きく外れてしまうこと

が少なくない。危険防止のため、スポッターマットをコーチが投げ入れて演技中止となることがある。子供中心の大会とはいえ、中々の高さである。小さな子供までならいざ知らず、それ以上は支える方も怪我しそうである。選手と自分の安全を願いつつ役目を果たした。

後で調べてみると、スポッターとは主に二つの意味で使われていて、一つはスポーツ全般における補助者のことで、モータースポーツでのドライバーの補助をする人(ナビゲーター)やフリークライミング、特にボルダリングでの安全を確保する人(TVなどで見る下でロープを持っている人)などである。もう一つは観測者全般を指すようで、気象観測をする人、はたまた航空ファンの中での、専ら航空機の撮影、観測を中心に楽しむ人との記載があって、いわゆる撮り鉄なんかもこれにあたるのだろうか。

そうすると、スポーツにおいてスポッターとはかなり重要な役割であろう。レーシングドライバーにとっては文字通りの命綱であり、トランポリンにおいても思い切って演技するために欠くことができない存在である。大会主催者の指定する4人以外に、選手指定で1人、横に立ってスポッターマットを投げる係を置くことができる。トランポリンは一度マットを投げて演技を中断すると、最初からのやり直しはおろか、演技の継続も許されない。選手の今までの努力を無にする覚悟でマットを投げるのである。

最近、長年勤務した病院を離れて、友人の病院に転勤した。地域住民にとっての、また病院にとっての良いスポッターでありたいと考えている。

(川西内科胃腸科病院)



平成28年度産業医研修会開催について
例年開催しております『産業医教研集会』を下記のとおり開催いたします。

多数の参加をお持ちしております。

日時：平成28年11月10日(木)午後6時30分

場所：札幌市医師会館 5階大ホール

演題：「ストレスチェックの現状について」

講師：北海道労働局 労働基準部

健康課長 木村 敏宏氏

主催：札幌市勤務医協議会

共催：札幌市産業医協議会・札幌市病院協議会

札幌市医師会・北海道医師会